大河ドラマ脚本②

「龍の時代」勝瑞事件編

　　　　　　　　　　　　　　　　三日木　人

大河ドラマ脚本②「龍の時代」勝瑞事件編○登場人物（すべて数え年）

三好長慶（三十二歳）　　　戦国天下人、幕府御供衆、筑前守、通称彦次郎

三好義賢（二十七歳）　　　長慶の長弟、阿波三好守護代、細川持隆（阿波守護）家臣

十河一存（二十二歳）　　　長慶の末弟、讃岐十河城主

松永久秀（四十六歳）　　　三好長慶の腹心、弾正忠

松永長頼（三十七歳）　　　松永久秀の弟、通称甚助。丹波攻略後、八上城主となる。

内藤国貞（不明）　　　　　丹波守護代、八木城主、松永長頼の岳父（義父）

三好長逸（不明）　　　　　三好一門の長老的存在

三好康長（不明）　　　　　三好長慶の叔父（笑岩、あるいは咲巌などと号す）

細川持隆（五十七歳）　　　阿波国守護（国主）、讃岐守

細川晴元（四十歳）　　　　元幕府管領、通称六郎、妻は六角定頼の娘

武田信豊（四十歳）　　　　若狭国守護、細川晴元とは相婿（義理の兄弟）

小少将（不明）　　　　　　細川持隆の愛妾、のち三好義賢の継室

久米義広（不明）　　　　　細川持隆の腹心、三好義賢の岳父、阿波芝原城主

小倉重信（不明）　　　　　細川持隆側近、阿波倉本城主

四宮与吉兵衛（不明）　　細川持隆近臣、国奉行

蓮池清助（不明）　　　　　細川持隆家臣、同じく家臣の星合弥三郎と共に殉死

寿阿弥（不明）　　　　時宗僧、播磨国人衆の使者

大河ドラマ②「龍の時代」勝瑞事件編（本編40分）

■場面テーマ【三好彦次郎義賢、主君の細川持隆を弑逆し、阿波一国を掌握す】

■梗概（あらすじ）

　天文二十一年（一五五二）正月二十八日、足利将軍義輝は、三好長慶と和睦し、亡命地の近江より帰京した。

　和睦の主たる条件は、管領・細川六郎晴元を隠居させ、その代わりに三好長慶が後ろ楯となっている典厩家の細川次郎氏綱を管領職に就かせ、京の細川京兆家（宗家）を継がせるというものであった。この京の政変に驚愕したのが、阿波守護の細川讃岐守持隆である。

　三好長慶に管領の座を追われ、京の都から若狭へと落ち延びた細川六郎晴元は、阿波守護・細川持隆の従弟にあたる。六郎晴元が管領職を追われたことで、持隆は長慶を恨み、旭日昇天の勢いを誇る三好家の力を怖れるとともに、これを抑えつけようと画策した。

　三好家の武威がこれ以上、盛んになれば、主筋である阿波細川家の権威はいずれ失墜し、最悪の場合、三好家の風下に立たされるかもしれないと危惧したのである。

　そこで、細川持隆は、阿波公方の足利義冬を擁立して、上洛をしようとした。阿波、讃岐の兵を糾合し、上洛の上、近江に亡命している足利義輝に代えて阿波公方の足利義冬を将軍職に就け、持隆自身は細川氏綱に代わって管領職となる。となれば、もともと家臣筋の三好長慶は、細川持隆の風下に立たざるを得なくなると考えたのである。

　しかし、そのためには、現将軍義輝の傀儡幕府や三好政権を排除しなければならない。もし、細川持隆が決起すれば、京の都は再び乱れ、戦火をこうむることは必至であった。

　細川持隆は、某日、勝瑞城に重臣を集め、上洛の意を伝えたが、京畿の巷を動乱に陥れるこうした妄動に、三好長慶の弟である三好彦次郎義賢が同意するわけがなく、そればかりか、義賢は持隆の上洛に協力できないと言い放ったのである。

　これに持隆は憤り、義賢暗殺を重臣の久米義広らと謀議した。だが、この企みを持隆の近臣であり、国奉行の四宮与吉兵衛から聞いた義賢は、逆に持隆を滅ぼすことを決意し、叔父の三好康長、弟の十河一存らとともに主君・細川持隆に兵を向けた。

　天文二十二年（一五五三）六月十七日、細川持隆は義賢暗殺の計略が洩れているのも知らず、わずかな近習とともに勝瑞の北にある龍音寺で月見の宴を催していた。そこを三好軍二千余が襲い、持隆は勝瑞の北西にある見性寺まで逃れたが、そこで自刃した。

　この勝瑞事件後、三好義賢は細川持隆の遺児・六郎真之を阿波守護とするとともに、持隆の愛妾・小少将を継室とした。すなわち、阿波守護・真之の義父となることで、阿波一国を実質的に支配掌握したのである。

　三好義賢が三好一族の策源地である阿波を支配下に収めたことにより、三好長慶の背後は固まり、その後、長慶は丹波、播磨を平定した。勝瑞事件は、長慶の畿内制覇を援ける原動力となり、長慶を天下人に押し上げることになった大きな出来事といえよう。

大河ドラマ脚本②「龍の時代」勝瑞事件編（本編40分）

■場面テーマ【三好彦次郎義賢、主君の細川持隆を弑逆し、阿波一国を掌握す】

○阿波・勝瑞城

　　　◎テロップ

　　　天文二十一年（一五五二）春

　　　阿波・勝瑞城

　　　書院の上座に阿波国主であり、勝瑞城主である細川讃岐守持隆が座し、書物を披見

　　　している。そこへ、近臣の久米義広が現れる。

　　　◎各人の名前テロップ

ナレーション「天文二十一年正月二十八日、足利将軍義輝は、畿内の覇者・三好長慶と和

　睦し、亡命地の近江より帰京した。和睦の主たる条件は、管領・細川六郎晴元を隠居さ

　せ、その代わりに三好長慶が後ろ楯となっている細川次郎氏綱を管領職に就かせ、京の

　細川京兆家（宗家）を継がせるというものであった」

義広「ただいま京の都から報せがあり、公方さまと筑前守が和睦し、公方さまにおかれま

　しては、此度、無事京にお戻りになられた由」

　　　細川讃岐守持隆、書見台から目を離し、義広を見遣る。

持隆「ほう、それは重畳至極。めでたいことではないか」

義広「それが……その……」

　　　義広の口ごもる口調に、餅箍が怪訝な表情を見せる。

持隆「何やらあったと申すか」

義広「御意。六郎晴元さまが管領職を解かれ、代わりに典厩家の細川次郎氏綱さまが新た

　な管領になられたとのことにございまする」

持隆「なにっ、六郎どのを幕政からはずしたとな」

義広「畏れ多くも、晴元さまは讃岐守さまのご従弟にあたられます。このような政変とも

　いうべき大事に際し、長慶どのから讃岐守さまに何のご相談もないとは、いやはや、長

　慶どのは主筋たる阿波細川家を何と心得ておられるのでございましょうか」

持隆「ううむ。筑前守、不遜なり。そもそもは家臣の分際でありながら、阿波国主の躬をつんぼ桟敷に置くとは……許せぬ。躬を虚仮にするつもりか」

義広「長慶どのは、将軍直臣の御供衆に出世し、今や幕府を牛耳っておるとか。分際をわ

　きまえぬ栄達を遂げた挙句、増長しておるのではありますまいか」

　　　持隆、義広主従、剣呑な表情で目を見交わす。

○若狭守護・武田信豊の館

　　　◎テロップ

　　　若狭守護・武田館

　　　広間の上座に若狭守護の武田信豊が座し、左右に重臣が居流れる。その中央に細川

　　　六郎晴元が無念そうな表情で信豊に訴える。

　　　◎各人のテロップ

ナレーション「管領職を解かれた細川晴元は、若狭の国の守護・武田信豊を頼って落ち延

　びた。晴元と信豊は、ともに近江守護・六角定頼の娘を娶っている。義理の兄弟の信豊

　に晴元は三好長慶に対する怨みつらみを述べ立てた」

　晴元「まったくもって、憤懣やるかたなし。長慶めに管領職を追われ、せがれの聡明丸

　まで人質に取られ申した。かくなる上は、この晴元、憎き筑前の首を刎ねるまで戦う所

　存。ぜひ武田どのにご助力賜りたい」

信豊「ご無念、深くお察し申す。聞くところによると、三好軍は丹波を攻め取る勢いとか。

　さすれば、この若狭もいずれあやういことになりかねぬ。ともに筑前守を討ち滅ぼしま

　しょうぞ」

　　　晴元、目を輝かす。

晴元「左様。筑前めは主筋の我に刃向かった外道。逆臣にござる。ぜひとも成敗せねば気

　が済みませぬ」

　　　ここで信豊、腕組みし、何やら考える様子を見せる。

晴元「……ん。いかがされた？」

信豊「たしか、阿波国主の細川持隆公は、ご貴殿の従兄にあたられるはず。となれば、こ

　の際、持隆公にご助勢を仰ぐ手も……」

晴元「おおっ、それはよい。持隆公を我らの陣営に誘い込み、阿波の三好義賢に上洛の挙

　兵を命じさせれば、長慶めは弟の軍と同士討ちと相なりましょう」

信豊「ふふっ。そこまで上手くいくとも思えぬが、試してみる価値はあるものと存ずる」

晴元「信豊どのは、こわいお方よ。では、早速、阿波の持隆どのに書状を送ってみましょ

　うぞ」

ナレーション「かくして、晴元の書状は阿波の勝瑞城に届けられた。この手紙を見た細川

　持隆は、上洛も悪くないと思いはじめた。阿波公方の足利義冬を擁立して新将軍職に就

　け、管領細川氏綱を排斥し、自らが管領となって幕政を仕切る、そして三好長慶の台頭

　をひしぎ、三好家を圧服させるという野望が芽生えたのである」

○阿波・勝瑞城

　　　◎テロップ

　　　天文二十二年（一五五三）

　　　阿波・勝瑞城

　　　広間の上段の間に細川讃岐守持隆が座し、その左右に側近の久米義広、小倉重信、

　　　国奉行の四宮与吉兵衛、さらに重臣の三好彦次郎義賢ら重臣らが居流れる。

　　　◎各人の名前テロップ

持隆「皆の者。躬は此度、阿波公方さまを奉じて上洛しようと思い定めた。今こそご政道

　を正すとき。上洛の上、この動乱の世を阿波細川家の手で鎮め、帝のご宸襟を安んじ奉

　るのじゃ」

義広「おおっ、讃岐守さま。なんと素晴らしいお考えでありましょうか。讃岐守さまのお

　志は、我ら一同の宿願でもございます。阿波、讃岐の兵を糾合し、大軍を擁して上洛し、

　我らの天下を打ちたてましょうぞ」

　　　横から小倉重信が同意する。

重信「ご上洛とは、まっことよきお考え。阿波公方さまにおかれましては、ご上洛の日を

　一日千秋と待ち焦がれておられます。讃岐守さまの御心を平島の義冬公にお伝えすれば、

　ついに我が秋、来たれりとお喜びになられましょうぞ」

　　　並み居る細川家の重臣一同、深くうなずき、持隆、満足そうな表情。

　　　しかし、その中で一人、三好義賢のみが不興げな表情を浮かべる。

持隆「いかがした。義賢。顔色が冴えぬぞ。何やら存念があるものと見える」

　　　一同の視線、義賢に注がれる。

義賢「ひと言、申し上げてもよろしゅうございますか」

持隆「うむ。構わぬ。申せ」

義賢「はッ。では申し上げますが、阿波公方さまを奉じて上洛となれば、現将軍の義輝公

　と将軍位を争うことになりましょう。合戦となることは必至かと存じまする」

持隆「それがいかがした」

義賢「さすれば、京の都は応仁の乱の再現となり、天下大乱となりかねませぬ。また、義

　輝公は朝廷がお認めになった将軍。すなわち義輝公に刃を向けるは、朝廷への叛逆とな

　り、濫りに乱を起こす妄動と誹りを受けましょう。ここは、ご自重あってしかるべし」

　　　このとき、久米義広が扇子で義賢を指し、大声を上げる。

義広「三好どの。讃岐守さまのご意向に逆らうとは、なんたる不敬不忠。天下大乱、朝廷

　への叛逆。ふんっ、何を申されるか。左様なこと、単なる言い訳に過ぎぬ。その本心た

　るや、兄の三好長慶どのと戦いたくないだけであろう」

義賢「それは申すまでもなきこと。今や我が兄長慶は、細川氏綱さまを管領と仰ぎ、将軍

　直臣の御供衆として幕府を支えております。すでに天下は定まっております。このよう

　なときに、上洛の兵を興せば、くどいようではございますが、阿波の乱として幕府はお

　ろか、朝廷からも非難されかねないと危惧いたしておりまする……」

持隆「ええいッ、黙れ、黙れ。わが意に逆らうとは、この不忠者めッ。さがれ、さがりお

　ろうッ！」

義賢「ははッ、申し訳ございませぬ。ではこれにて失礼仕る」

　　　義賢、平伏の上、広間を退出。

　　　その姿が消えたとき、持隆が癇癪玉を爆発させる。

持隆「義賢、家臣の分際で不遜なり。ええいッ、どうしてくれよう」

　　　ここで、義広が何やら持隆に耳打ちする。

持隆「なにッ、それはまことか。ますますもって聞き捨てならぬ」

ナレーション「このとき、久米義広は、持隆の耳にあらぬことを吹き込んだ。それは、三

　好義賢と持隆の愛妾・小少将との不義密通の噂であった。これに憤った持隆は、守護代

　の義賢に謀叛の濡れ衣を着せて成敗し、しかる後、上洛の兵を興すことを発作的に決意

　した。乱心である」

○勝瑞城近くの吉野川河畔

　　　◎テロップ

　　　天文二十二年（一五五三）六月

　　　吉野川河畔

　　　吉野川の川面が、真夏の陽に輝く。

　　　その河畔で責め馬（馬の調教）に興じる三好義賢。

　　　そこへ、細川持讃岐守隆の近臣であり、国奉行の四宮与吉兵衛が現れる。

与吉兵衛「一大事にございます。讃岐守さま、ご乱心」

義賢「なにッ、持隆公、ご乱心とな。いかなることぞ」

与吉兵衛「上洛に反対する義賢さまを謀叛人としてご成敗すると、久米どのらと息巻いて

　おるのでございます。それを聞き、身共は恐ろしくなりまして、何はともあれ、かくご

　注進に及んだ次第」

義賢「ふむ、左様か。よく報せてくれた。礼を申す」

与吉兵衛「なんの。この阿波で最も力のある三好家と事を構えるなど、烏滸の沙汰としか

　申せませぬ。疾く三好館に戻られ、ご重臣方を集め、善後策を講じられませ。後手に回

　っては命取りになり申す」

義賢「うむ。相わかった」

与吉兵衛「今宵、讃岐守さまは久米どの、小倉どのら側近衆、旗本衆を集めて、勝瑞城に

　て義賢さまを討つための計略を練るとのことにございます。そこに身共も呼ばれており

　ますれば、明朝には三好館に参上し、詳細をご報告申し上げる所存」

義賢「それは、かたじけない。では、明朝、待っておるぞ」

ナレーション「与吉兵衛からの急報を受け、義賢は叔父の三好康長、讃岐からは弟の十河

　一存を呼びよせ、ひそかに反撃の準備を整えはじめた。事態は風雲急を告げようとして

　いた」

○勝瑞・三好館の広間

　　　◎テロップ

　　　勝瑞・三好館

　　　三好館は勝瑞城の東隣、「東勝地」という場所にある。

　　　早朝、この三好館を訪れた四宮与吉兵衛。

　　　三好館の広間には、上座に三好彦次郎義賢、その左右に義賢の叔父三好山城守康長、

　　　弟の十河一存ら一族衆が居流れる中、四宮与吉兵衛は、勝瑞城内において昨夜開か

　　　れた義賢暗殺の謀議の一部始終を洗いざらい密告する。

　　　◎各人の名前テロップ

ナレーション「翌朝、四宮与吉兵衛は、勝瑞城のすぐ東にある三好館を、人目を忍んで訪

　れた。三好館では、阿波三好家の当主義賢をはじめ、義賢の叔父山城守康長、弟の十河

　一存といった一族衆が待ち構えていた」

康長「此度、勝瑞城にて、まことに由々しき企みがなされているとか。しかも、その首謀

　者たる者が、我ら三好家の主君である細川持隆公とは信じられぬ。与吉兵衛どの、まこ

　とであろうな」

与吉兵衛「神仏に誓って、嘘いつわりのない話にござる。昨夜、讃岐守さまにおかれまし

　ては、六名の旗本衆を呼び集め、義賢さま成敗につき、二刻余も話し合われました。無論、身共もその場に列席し、密議の一部始終、この耳に収め申した」

　　　三好義賢、眉根を寄せて腕組みし、三好康長と十河一存の二人、目を見交わす。

一存「して、密議の場にいた六名とは？」

与吉兵衛「身共を含め、久米義広どの、小倉重信どの、佐野平明どの、野田内蔵助どの、

　仁木高将どのの面々でござる」

　　　義賢、歎息を洩らす。

義賢「で、いかにして、それがしを成敗するというのじゃ」

与吉兵衛「後日、勝瑞城にて相撲の御前試合を執り行い、それを口実にして義賢さまをお

　びき寄せ、殺め奉るとのこと」

　　　康長、甥の三好義賢に向き直り、話しかける。

康長「彦次郎、聞いたか。もはや猶予はならぬ。殺らねば殺られるぞ。大変なことになっ

　たものじゃ」

義賢「なれど、相手は父祖代々の主家であり、お主殺しは天下の大罪。そのようなことを

　仕出かして、越水城の孫次郎兄者に怒られまいか」

ナレーション「孫次郎とは、三好義賢の兄長慶のことである」

康長「ばかなことを申すな。やむを得ぬ仕儀じゃ。孫次郎が怒っても仕方あるまい。それ

　に、上洛の兵を計画しておるというではないか。さすれば天下大乱。許されることでは

　ない」

義賢「ふむ」

一存「叔父御、持隆公を討つにしても、いつやる。延び延びにしては、こちらの計画も相

　手方に洩れるやもしれぬぞ。やるなら、いっそ早いほうがよい」

与吉兵衛「近々、讃岐守さまは龍音寺にて月見の宴を催されるはず。たしか、五日後の六

　月十七日……」

　　　三好義賢、三好康長、十河一存ら目を見交わし、深くうなずく。

ナレーション「天文二十二年六月十七日の夜、三好康長と十河一存に率いられた三好軍二

　千余の兵は、細川持隆を急襲した。月見の宴はたちまち騒然たる修羅場と化し、持隆はかろうじて当時勝瑞城の北西にあった見性寺まで逃れた」

○勝瑞城北西・見性寺

　　　◎テロップ

　　　勝瑞・見性寺

　　　見性寺の境内に、充ち満ちる三好の軍勢、軍馬のいななき。

　　　鎧姿の三好康長と十河一存の二人が、本堂に向かう。

　　　◎各人の名前テロップ

康長「これなるは三好山城守にござる。畏れながら讃岐守さまに申し上げる。かくなりて

　は、もはや詮なきことなれば、お腹を召して、しかるべきかと存じ奉る」

　　　本堂から声が聞こえてくる。

清助「我ら、讃岐守様に仕える譜代の臣、蓮池清助と星合弥三郎にござる。両名、讃岐守

　さまのご最期を見届け、死出の旅路をともにする覚悟なれば、いましばらくのご猶予を

　賜りたい」

康長「ご立派なるお覚悟。たしかに承った。では、我ら、ここに静かに控えておりますれ

　ば、存分にお腹を召されよ」

清助「かたじけなし。半刻後、本堂に参られいッ」

　　　半刻後、三好康長と十河一存の二人が本堂に進む。

　　　そこに細川持隆、蓮池清助、星合弥三郎の三人の亡骸が横たわっている。

ナレーション「この勝瑞事件後、細川持隆の重臣、久米義広、小倉重信らは、主君の仇を

　奉ずるべく三好義賢に弔い合戦を挑んできた。世にいう鑓場の戦いである。この戦いを

　制した義賢は、抵抗勢力を一掃し、実質的に阿波一国を掌握した」

○阿波・勝瑞城

　　　◎テロップ

　　　天文二十二年（一五五三）七月

　　　阿波・勝瑞城

　　　勝瑞城の奥書院で三好義賢、そし細川持隆の愛妾・小少将の二人が余人を遠ざけ、

　　　何やら話し合っている。

　　　◎テロップ

　　　小少将

ナレーション「その日、三好義賢は、今は亡き細川持隆の愛妾・小少将と、これからのこ

　とを話し合った。小少将は少女の頃から南海に稀なる容姿と謳われる絶世の美女であり、

　讃岐守持隆との間に、嫡男の細川六郎真之をもうけていた」

義賢「此度、やむを得ぬ事情により、讃岐守さまを弑し奉った。小少将どのにおかれては、

　さぞかし心細い思いをしておられよう。心中、お察し申し上げる」

小少将「まことに悲しいことにございます。さりながら、これも前世からの定め、宿世の

　因縁と思い定めるほかになく、今となっては、申すべき言葉もございませぬ。それより、

　事ここに至りましては、わたくしめの一番の関心事は、讃岐守さまのお子であり、わた

　くしめが腹を痛めた六郎どのがこと。義賢さまは六郎どのをどうなされるおつもりでご

　ざいますか」

義賢「それがしは、ご嫡男の六郎どのを害したりはせぬ」

小少将「まことでございましょうや」

義賢「しかとお約束いたす。この阿波の国は、代々細川家が守護する国。此度、讃岐守さ

　まは突如ご乱心され、ああいう悲惨な結果になり果て申したが、持隆公ご嫡男の六郎ど

　のに何ら罪はない。跡目を継いで阿波国主となられるのが当然のことと存ずる」

　　　小少将、目をみはる。

小少将「それは、かたじけないこと。うれしゅうございます」

義賢「ついては、小少将どの。卒爾ながら、そなたをわが妻としたい。ご存知のように、

　わが妻は久米義広どのの娘でござったが、先の鑓場での合戦を控えて離縁し、今は独り

　身よ。それに……」

小少将「それに……」

義賢「それに、それがしは前々からそなたを好いておる。何事も以心伝心。そなたも、そ

　れがしのことを、内心では憎からず思われておったのではなかろうか」

　　　小少将、思わぬ話の成り行きに息をのみ、顔を朱に染める。

　　　その様子を見て、義賢が破顔する。

義賢「ふふっ。突然このような話を切り出され、内心驚かれたであろうが、この儀、小少

　将どのにぜひご同意の上、我が妻となっていただきたいものと存ずる。我ら夫婦となっ

　て、六郎どのを細川家当主として盛り立て、阿波の国を治めることが肝要と心得る。い

　かがでござろう」

　　　小少将、三好義賢の前に三つ指をつき、言上する。

小少将「わたくしのような側女の立場の者に、もったいなきお言葉。謹んでお受けさせて

　いただきまする。実は、わたくしめも、あなたさまのことを心の内でお慕い申しており

　ました」

義賢「おおっ、やはり左様であったか。これは、うれしいことよ」

小少将「お優しい義賢さまの妻となり、讃岐守さまの忘れ形見、六郎どのの行く末を見守

　れることは、我が大きな喜びにございます。この上は、義賢さまと琴瑟相和し、あなた

　さまの御子をもうけることが、わが役目。勝瑞城の奥向きのことは、わたくしめが立派

　に果たしてまいりたいと存じます」

　　　義賢、満足げにうなずき、小少将に頬笑む。

ナレーション「かくして、小少将は三好彦次郎義賢の妻となり、勝瑞城の女主人となった。

　勝瑞の名花・小少将は、その後、大形どのと呼ばれ、義賢との間に阿波三好家世継ぎの

　長治、讃岐十河家の養嗣子となった存保、淡路安宅家に養子入りして家督を継いだ神五

　郎らの子女をもうけた」

○摂津・越水城

　　　◎テロップ

　　　三好長慶の居城・越水城

　　　越水城の庭で、片肌脱ぎとなって、弓道の稽古に励む三好長慶。

　　　そこへ、長慶腹心の松永久秀が現れる。

　　　各人の名前テロップ

久秀「お屋形さま、さきほど山城守さまが阿波から参着されました」

　　　長慶、弓を小姓に渡し、久秀に向き直る。

長慶「何用か」

久秀「それが急用とかで、委細はお目通りしてから直接申し上げると」

長慶「ふむ」

久秀「見たところ、お疲れのご様子。ただいま、書院にて一服されております」

長慶「相わかった」

　　　長慶、弓道の稽古を取りやめ、着替えのため、渡り廊下をゆく。

○越水城・書院の間

　　　書院の間・下座で、茶を喫しながらくつろぐ三好康長。

　　　その傍らに、松永久秀が控える。

　　　やがて、廊下に足音が立ち、大紋入りの素襖・袴姿に容儀を改めた三好長慶が現れ、

　　　上座につく。

長慶「叔父御、急用とか。阿波で何か異変があったのでござろうか」

康長「左様。ちと言いづらいことがあってのう。とりあず、このわしが彦次郎の名代として参ったのよ」

　　　長慶、眉をひそめて、康長に先を急がす。

長慶「はて、言いづらいこととは？」

康長「実は、阿波御所の讃岐守さまをわれら三好の手で弑し奉った」

長慶「なッ、なんと、まことでこざるか」

康長「このようなこと、嘘や冗談で言えようか」

　　　ここで、久秀が横から口をはさむ。

久秀「して、いかなる理由があってのことでござろうか」

康長「それが、讃岐守さまが阿波、讃岐の兵を糾合して、上洛すると言い張ってのう。こ

　れに彦次郎が異を唱えたものじゃから、感情がもつれたのか、成敗するという話になっ

　た。上洛は彦次郎を血祭りにあげてからということになったのよ」

長慶「それで先手を打ったと」

　　　康長、大きくうなずく。

久秀「それにしても、上洛するには大義名分が必要。それは、いかなるものでござったか」

康長「上洛し、ご政道を正すとのことであったと聞くが、そのような大義名分など体のい

　い飾り物に過ぎぬ。つまるところは、自分の従弟である晴元公が管領職から追いやられ

　たのが気に喰わぬのであろう。われら三好の力が盛んになるのも、まずいと考えたのや

　もしれぬ。そこで、阿波公方の足利義冬さまを奉じて上洛し、現在の幕府を打倒し、自

　らが管領職に就き、天下を牛耳るという野望を抱かれたものと察する」

久秀「ゲッ、無謀なことをお考えになったものでござるな」

康長「まったくもって世間知らずよ。第一、彦次郎が成敗されれば、われら三好の者はた

　だちに仇討ちせねばならぬ。阿波は三好家と細川家の二派にわかれての合戦となり、争

　乱の坩堝となろう。多くの血が流されることになるのよ」

長慶「叔父御、よくわかり申した。彦次郎に伝えてくだされ。この上は入道し、亡き持隆

　公の菩提を弔うべし、と」

ナレーション「この後、義賢は、おのれに野心のないことを阿波国人衆に示すためにも入道し、物外軒実休と号した」

康長「それと、もう一つ報告がある。此度、彦次郎は讃岐守様の愛妾であった小少将どの

　を娶るとともに、ご嫡男の六郎真之さまを阿波守護、つまり阿波細川家の当主に立てら

　れた。雨降って地固まるではないが、これにより阿波一国は丸く治まるであろう」

久秀「持隆公の遺児であられる真之さまを阿波守護にされるとは、深謀遠慮なご英断。ま

　して、義賢さまが小少将どのと夫婦の契りを結ばれ、真之さまの義父となられれば、細

　川家と三好家は一体となり申す。となれば、阿波に余計な波風は立たず、四海平穏とな

　りましょう」

　康長「左様。まさに禍い転じて福となすとは、このこと。今後とも阿波三好家及び彦次

　郎のことは、この山城守が微力ながら力を尽くして参る。三好ご本家におかれては、畿

　内平定に専念されるがよかろう。無論、阿波三好家もご本家と手を携え、天下統一、ひ

　いては理世安民の世を築くべく力の限り、ご本家を後押しする所存にござる」

　　　長慶、康長の言葉にうなずく。

ナレーション「ともあれ、三好義賢が阿波一国を制したことにより、三好長慶の背後は固

　まり、三好軍はさらに強大なものとなった。将軍足利義輝を近江に追い落とすや、叛旗

　を翻した芥川山城を攻め落とし、丹波を平定するなど連戦連勝の勢いを示した。勝瑞事

　件は三好家の勢力圏を大きく飛躍させるきっかけとなったのである」

○丹波・数掛山城

　　　◎テロップ

　　　天文二十二年（一五五三）九月

　　　三好軍・丹波攻め

　　　「蔦紋」の旗幟を打ち立てて、進軍する松永軍。

　　　軍馬が嘶き、陣鼓、陣貝が鳴り響く。

ナレーション「天文二十二年、三好長慶は松永久秀・長頼兄弟に丹波平定を命じた。細川

　晴元陣営の波多野一族が、長慶方の丹波守護代・内藤国貞に叛き、争乱を繰り返し、京

　都の治安をも脅かしていたからである」

　　　　◎各人の名前テロップ

国貞「久秀どの、援軍かたじけない。いやはや、この国貞の力が足りぬばかりに申し訳ご

　ざらぬ」

久秀「なんの。ともに天下を乱す波多野一族を成敗し、丹波一国に平安をもたらしましょ

　うぞ」

長頼「御義父上、われら死に物狂いで働きますゆえ、お任せあれ」

ナレーション「松永長頼は、内藤国貞の娘聟であった」

国貞「うむ。頼もしきことよ。長慶どのは、よいご家臣に恵まれておる。うらやましきこ

　とよ」

久秀「まずは、目の前の数掛山城を落とし、初戦勝利といきたいものでござる。いざ」

国貞「いざ、ともに参ろう」

　　　松永久秀・長頼の兄弟、内藤国貞の三人、馬に跨り、兵を率いて敵方に吶喊する。

　　　矢が空を黒々と覆って飛び交い、足軽雑兵の槍合わせがつづく。戦場に敵味方の雄

　　　叫びが響く。そのとき、後方から敵の急襲。味方の軍から悲鳴と叫喚が起きる。

久秀「いかぬ。敵の奇襲じゃ。ひけ、ひけいッ」

国貞「うっ！」

ナレーション「松永・内藤連合軍が混乱に陥ったとき、一本の流れ矢が国貞の胸を貫いた」

長頼「御義父上！」

　　　松永長頼、鞍上からもんどり打って落馬した岳父の内藤国貞を抱き起こす。

　　　それを見た久秀が「もはやいかぬ」とばかりに首をふる。

　　　このとき、長頼に物見の兵の急報が入る。

物見「ご注進。八木城が敵に包囲され、あやうし。すぐさま援軍を送られたし」

長頼「なんと！」

久秀「ここは、この兄に任せ、そなたは一軍を率いて八木城に駆けつけるべし。急げ！」

長頼「おうっ。では、お頼み申す」

ナレーション「松永長頼は急ぎ、八木城を救うべく駆けつけたが、すでに城は敵の手に落

　ちていた」

　　　長頼、兵を率いて八木城を果敢に攻め、馬上で叫ぶ。

長頼「者ども、死ねや、死ねッ。八木城を取り戻すのじゃ。この一戦に、命を賭けよ」

ナレーション「八木城は丹波平定の拠点として欠かせない重要な城であった」

　　　軍馬が嘶く。敵味方の喊声、叫喚が響く。

　　　両軍による血みどろの白兵戦が繰り広げられた結果、松永長頼軍が凱歌を挙げる。

長頼「勝ったぞ。われらが勝利ぞ。勝鬨を挙げよ。エイエイオーッ！」

将兵「エイエイオーッ、エイエイオーッ！」

　　　長頼が返り血を浴びた顔で叫ぶ。

長頼「それッ、もう一回。エイエイオーッ！」

将兵「エイエイオーッ！」

ナレーション「やがて、松永長頼は丹波一国を制した。この丹波平定により、長慶の勢力圏は、山城、摂津、丹波、和泉、阿波、淡路、讃岐の七カ国に、伊予の一部を合わせた広大な地域に及んだ。もはや事実上、中央の覇者であった。阿波勝瑞城の三好義賢、淡路炬ノ口城の安宅冬康、讃岐十河城の十河一存ら兄弟、そして松永久秀・長頼兄弟ら有能な一

　族一門の力の結集が三好長慶という戦国最初の天下人を誕生させたのである」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　一日放映分（40分終わり）

※大河ドラマ脚本③「龍の時代」環大阪湾政権編につづく。